

第39回量子ビーム利用推進小委員会
議論の概要

議題(1) 次世代放射光施設の整備進捗状況について

- 施設の実験ホールの非放射線管理区域化が実現すれば、産業界を含めユーザーの施設利用の利便性向上につながるが見込まれ、また国内の他放射光施設への波及効果も期待できるため、ぜひ進めていただきたい。
- コアリションビームラインの「マスター、スレーブ」という名称については誤解を招かないような名称の仕方を検討してもよいのではないか。
- パートナー側においては、以前から人的資源の課題があったが、東北大学でセンターが新設され、大きく関与いただいているということは、安心材料であると感じる。
- コアリション・コンセプトは新たな産学連携の枠組みとして、うまく機能すれば他の施設にも波及効果が期待できる。
- コアリション・コンセプトの枠組みのなかで、大学と企業の間には分析会社を置いており、放射光の利用を広げる新たな取組として期待できる。

議題(2) 量子ビーム連携プラットフォームの取組について

- 複数施設に精通した研究者・コーディネーターの育成のためには、複数施設を実際に利用しながら学ぶことが重要。一方で、施設側において人材が足りていないという大問題があり、
 - ① 自動測定等を活用することで少しでもスタッフの時間的な余裕を作ること
 - ② 民間活力を活用する仕組みを作ることが必要。
- KEK 物構研は以前からマルチプローブ利用に取り組んできたが、量子ビーム連携研究センター(CIQUS)が新設されたことで意識変化が起き、量子ビーム連携利用がうまく回っている、ということは注目に値する。
- 機械学習やAI等に精通する人材を施設で抱えるということは難しい。複数の量子ビーム施設の研究者と連携できるような場を設けることが重要。
- 放射光や中性子の各学会ではマルチビームを推進しようという動きが出つつあるが、こうした動きと、各施設が連携していくことが重要。

以上